

2023年12月21日発行  
日本比較文化学会関東支部

2023年度第2号のレター発行となります。本号では、2023年12月17日(日)に富山短期大学(遠隔会議室)にて開催されました「第60回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 長田 元

### ◆第60回 関東支部例会 ご報告◆

2023年12月17日(日)、富山短期大学・遠隔会議室(zoom)において第60回関東支部例会が開催されました。当日は5名の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

#### ◆開会の挨拶: 関東支部 支部長 高橋 強 (東海大学)

#### ◆研究発表:

##### 1. スポーツ英語教育に関する一考察

高橋 強

東海大学湘南校舎 准教授

今回の発表において、スポーツ英語教育とはどのような英語教育であるのかについて発表者自身の独自の観点から考察した事柄に関して述べることとする。近年、盛んに様々な大学で実践されている内容言語統合学習(Content and Language Integrated Learning; 以下CLIL)では、英語教育に体育の要素を取り入れた、いわゆるCLIL体育を授業で実践することにより、各競技に特化した英語を学ぶことが出来るという利点について述べることとする。また英語の授業のみならず体育教育の効果も高めることができ、相乗効果をも高めることも出来るのである。Devos(2012)によると、CLIL体育により単純な英語能力が向上するだけでなく英語学習意欲も向上することが報告されている。英語が不得手な学生がCLIL体育において英語を話すようになり、英語を話すことに対する自信の向上にも繋がっていると報告されています。この自信の向上はイギリスにおいてフランス語を用いて行われたCLIL体育においても同様の報告がなされています(Lamb & King 2020)。つまり英語を話すというリスク(risk-taking)を肯定的に捉え不安(anxiety)を抱えながらも、徐々に英語を話すことで不安を解消していくことができるのである。また、実際に使用するスポーツの英語を習得することでより効果的に英語習得に繋げることができるのである。しかし、全てを英語でやるということはかなりハードルが高いので簡単なことは英語で話し、競技の説明など最初は日本語で説明し、徐々に英語で話してもらうという授業形態が望ましいのである。大学生という大人を対象としているので特に力を注いでいるのがプレゼンテーションの

英語である。自分の意見をしっかりと英語で述べることで自信を身につけさせることが重要であるということと、もう一つは勝利者インタビューにおける質問に英語でしっかりと答えられるようにしてあげることが重要である。今回の発表では、様々な例を取り上げて発表していくこととする。

#### 参考文献

- Devos, N. (2012). Content and language integrated learning in physical education: Evidence for language and content scaffolding during peer interaction. In *Learning Autonomy in the English Classroom: Empirical Studies and Ideas for Teachers*.
- Lamb, P., & King, G. (2020). Another platform and a changed context: Student experiences of developing spontaneous speaking in French through physical education. *European Physical Education Review*, 26(2), 515-534.

## 2. 中国の大学における日本語非母語話者教師の日本語母語話者教師との協働に対する期待

李 雪珍

宇都宮大学大学院 博士後期課程

「複数の教師が日本語教育の現場(教室、組織・機関、地域等)で問題解決や目標に向かって協力し、互いに学び、成長すること」(中山ほか 2015)と定義される協働は、海外日本語教育現場では、授業・研究・課外活動などにおいて、必然的に生じる。しかし、大部分の日本語母語話者教師と非母語話者教師が経験しているにも関わらず、教師がそれを「協働」として捉えていない。この現状をふまえ、本研究は、母語話者教師・非母語話者教師両者に向けて、協働の意識的な実践を提案する。

本研究は、中国各地の大学の現職非母語話者教師を対象に、インタビュー調査によって、協働に関する意識、態度を調査し、個人別態度を探る PAC 分析 (Personal Attitude Construct) を用いて分析する。そして、協働が成立する条件を検討する。また、日本語非母語話者教師が日本語母語話者教師に対する期待を明らかにする。本研究の結果を踏まえ、中国の大学で働く日本語教師に有益な示唆を与えたいと考える。

#### 参考文献

- 中山英治・門脇薫・高橋雅子(2015)「日本語非母語話者と日本語母語話者による教師間協働の実態調査報告—タイの高校における協働環境と協働内容—」『いわき明星大学人文学部研究紀要』28、pp19-24.

## 3. 脱北者視点からの北朝鮮向け情報発信 ～「北韓改革放送」の事例を中心に～

田中 則広

淑徳大学 准教授

1990年代から2000年代にかけて大韓民国(以下、韓国)では、朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)との関係改善を推進する進歩系政権の下、北朝鮮向けの情報発信に大きな変化が生じた。当時、公営放送(日本の公共放送に相当)のKBSが担ってきた北朝鮮向けラジオ放送(以下、対北放送)は、批判的な内容の自制や、放送規模の縮小などが求められ、チャンネルの性格自体が変容していった。こうした中、対北放送の弱体化を不安視する人権活動家や脱北者の間から、北朝鮮に向けた情報発信の動きが出てきた。

民間が実施する対北放送はすでに20年近い歴史を持っているが、本報告では、脱北者らが中心とな

って立ち上げた「北韓改革放送」に絞り、その役割と課題を検討した成果を伝える。

検討結果からは、聴取ターゲットを北朝鮮のエリート層に絞り込み、国際情勢、人権問題、哲学など、聴取層の知識レベルの高さに合わせたコンテンツを重点的に編成していることや、運営資金の大半を米国の政府系機関に依存することで、韓国の国内政治の直接的な影響から距離を取ろうとする運営上の工夫を確認することができた。また、かつて北朝鮮に対する否定的な情報の発信は、公共機関が中心となって担っていたが、現在ではその役割を民間組織が果たしていることも明らかになった。

#### **4. 文学社会学の一試み: 共同体の観点によるフランス心理小説の再検討**

高橋 暖

筑波大学大学院 博士後期課程

心理分析小説はフランス文学の代名詞とも言われ、情動的な筋立てや社会的背景を用いつつ、人間の心理を観察することに注力した小説群を指している。そこには様々な作品が分類されるわけだが、それらを精読していくと、世間に迎合しようとする人々とそうでない人々が存在することに気づく。つまり、世俗的かつ一般的であることを無意識に望み、普通から外れていった恋人との関係から脱しようとする者と、反対にその関係を維持しようとする者に分けられるということである。この差異が両者の意識に影響を及ぼし、心理状態を激しく揺さぶることにより、分析をより容易いものにしていくと考えられる。

そして本発表が提起したいのは、そういった人々の様態というのは社会学、とりわけ共同体の観点から意義付けることが可能なのではないかということだ。例えば、エミール・デュルケームによって提案された「集合意識」(conscience collective) は、個人の意識を社会的、外在的に規定するという点で作中人物の特徴と合致するし、あるいはまた、社会学の文脈からデュ・ピュイ・ド・クランシャンなどによって研究されてきたスノビズムという観点もここに当てはまる。

以上から本発表では、フランス心理小説の中からいくつかの作品を取り上げ、社会学のアプローチによって各作品に共通する共同体の構造を抽出することで、作中人物たちがどのように描かれているのか、また心理分析手法がどのようなものであったのかを再検討してみたい。

◆閉会の挨拶: 関東支部 支部長 高橋 強 (東海大学)